

『和泉式部日記』 に見る敦道親王

～橘の贈答をめぐって～

文19－118 大西理瑚

論文の目的

『和泉式部日記』とは、和泉式部と敦道親王の恋路を描いた作品である。出会いから、和泉式部が南院入りし北の方が退出するまでの間、橘から始まり、五月雨、七夕と四季折々の贈答歌を経て、二人の関係が深まっていく様子が紡がれている。

しかし、この作品に描かれている敦道親王の様子は、『大鏡』・『栄花物語』に語られている内容とは隔たりがある。このことを起点とし、『和泉式部日記』冒頭の橘の贈答に焦点をあてながら、他作品との比較を通じて『和泉式部日記』が描かれた背景やその意図を浮かび上がらせる。

① 『大鏡』 ・ 『栄花物語』 と 『和泉式部日記』

〈大鏡〉 為尊親王・敦道親王について

・ 「この春宮の御弟の宮達は、少し軽々にぞおはしましし。」

「この宮たちは、御心の少し軽くおはしますこそ、」

→ 敦道親王は軽薄であると繰り返されている。

・ 「御前にて御襪のいたうせめさせたまひけるに、…」 (道長の前で、襪の履き心地の悪さに耐えられず、脱がせてもらった。)

→ 敦道親王の折をわきまえない行動が取り上げられている。

〈和泉式部日記〉

・ 「なにかは、あだあだしくもまだ聞こえ給はぬを、はかなきことをも」
(和泉式部)

→ 敦道親王に軽薄だという噂はないとしている。敦道親王が世間体を気にする様子も描かれている。

・ 「折過ぐし給はぬをかしと思ふ。」 「かかる折に、宮の過ごさずのたまはせしものを、」 「例の、折知り顔にのたまはせたるに、日ごろの罪も許し聞こえぬべし」 「なほ、折ふしは過ぐしたまはずかし。」 (和泉式部)

→ 敦道親王が折に合った歌や贈り物をする様子が繰り返し描かれている。

〈栄花物語〉北の方の退出について

「されば東宮も、宣耀殿も、「このことをわが口入れたらましかばいかに聞きにくからまし。知らぬことなれば、心やすし」とぞ思しのたまはせける。」

→北の方の姉、宣耀殿女御は「この縁を仲立ちしていたらどんなに聞きづらいことだっただろうが、あずかり知らぬことだから気が楽だ」と、無関心な様子が記されている。

〈和泉式部日記〉

「いかにぞ。このごろ人の言ふことはまことか。われさへ人げなくなむおぼゆる。夜のまにもわたらせたまへかし」（宣耀殿女御）

「宮たちをも見たてまつり、心もなぐさめはべらむと思ひたまふる。迎へにたまはせよ。」（北の方）

→宣耀殿女御は敦道親王と北の方の悪い噂を聞きつけ、気遣いの手紙を送っている。北の方もこれに返事をし、宣耀殿女御により用意された車で退出したとされている。

⇒『和泉式部日記』には、『大鏡』・『栄花物語』とは異なる側面が描かれている。

②『和泉式部日記』橘の贈答をめぐる

〈冒頭のあらすじ〉

四月の十日すぎ、為尊親王の逝去を嘆き、空虚な日々を過ごしていた和泉式部の元に、かつて為尊親王に仕えていた小舎人童が訪ねてくる。

為尊親王の弟である敦道親王の命で、橘の枝を届けにきたのである。和泉式部は届いた橘を見て、次の古歌を連想する。

さつきまつ花橘のかをかげば昔の人の袖のかぞする

(古今集・夏・一三九・よみ人しらず)

花橘の香りが、昔の人を懐かしく思い出させるという歌意である。そこで和泉式部は、

薫る香によそふるよりはほととぎす聞かばや同じ声やしたると

と返歌をする。この歌を受け取った敦道親王は、

同じ枝になきつつをりしほととぎす声は変はらぬものと知らずや

「兄弟なのだから、私は為尊親王と同じ声をしていますよ」と歌を返した。



〈和泉式部の返歌「薫る香に…」は、2種類の解釈が可能〉

*ほととぎすの声は、
「女性の元を訪れる男性の声」に喩えられ、恋の歌に詠まれる。

(例) 「誰が里に夜離れをしてか郭公ただここにしも寝たる声する」(古今集・恋歌四・七一〇・読人しらず)

・よって、敦道親王を新たな恋の相手として、その声を聞きたいとする歌だと捉えられる。

→「橘の香りによそえて兄宮様を偲ぶより、兄宮様と同じ声をしているかどうか、弟であるあなたの声を聞きたい。」

⇒直接会いたいという、敦道親王への積極的な恋の歌を返した。

*ほととぎすは、
「昔と同じ声で鳴く」とされ、昔を懐かしむ歌に詠まれる。

(例) 「五月まつ山郭公うちはぶき今も鳴かなむ去年のふるこゑ」(古今集・夏・一三七・読人しらず)

・よって、亡き為尊親王の懐かしい声を再び聞きたいとする歌だと捉えられる。

→「橘の香りによそえて兄宮様を偲ぶより、存命の頃と同じ声をしているかどうか、もう一度あの方の声を聞きたい。」

⇒単なる挨拶として、為尊親王への追慕の歌を返した。

〈源氏物語「夕顔」の出会いの場面〉

光源氏が、通りすがりに、塀に這いかかって咲いている花を見て、「をちかた人にももの申す」と花の名を尋ねた。隨身が「夕顔」という花だと答えると、一枝折ってくるように命じる。隨身が門に入ると、女童が出てきて白い扇を差し出し、その上に花を載せて差し上げるように言う。その扇には次の歌が書かれていた。

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

〈夕顔の歌「心あてに…」も、2種類の解釈が可能〉

- 「白露の光」を源氏の喩えとし、「夕顔の花」を女の喩えであると捉えた場合。

→「当て推量に、あのお方ではないかと思っています。白露のようなあなたは、かの源氏の君ではないかと。あなた様の光を受け、夕顔の花（私）も輝いています。」

⇒源氏の目にとまったという女の喜びと期待を暗に示した恋の歌を贈った。

- 「白露の光」を源氏の喩えとし、「夕顔の花」は女の喩えではないと捉えた場合。

→「おそらくその花だと思って見ております。白露の光（あなたさまのお姿）にまばゆく照らされた夕顔の花を。」

⇒源氏の問いかけに応じ、単なる挨拶として、白い花の名を夕顔だと答えた歌を贈った。

*和泉式部の返歌が二通りに解釈可能であることは、作品の展開に大きな影響を与えているといえる。また、挨拶の歌と恋愛の歌、いずれにも解釈可能である返歌を女が返し、恋愛が発展するという筋道は、作り物語である『源氏物語』「夕顔」とも共通している。

⇒伝統と流行を取り入れつつ、滞りのない場面展開を持っている当場面は、作り物語の趣を持っているといえる。

まとめ

『和泉式部日記』は美しい作品である。季節とともに流れるように描かれている二人の関係、それは人に読まれることを前提とし、作者によって洗練されたものだと言ってよいだろう。橘の贈答はその代表的な場面といえる。読者は、その洗練された作品の中で、噂で聞いた敦道親王の人物像との隔たりに直面する。それこそがこの作品の主題なのではないだろうか。